

先天性股関節脱臼

石田整形外科医院 院長
石田 憲毅 先生

胎内あるいは出生後に股関節が脱臼している状態を先天性股関節脱臼と言います（以下、先股脱）。わが国では4カ月健診の検査項目に含まれています。比較的予後の良い疾患ですが、予後は発見が早ければ早いほど良いのは言うまでもありません。新生児で確認できる危険因子としては脱臼の家族歴（家族に股関節脱臼の既往が無いかどうか）や骨盤位（危険性は10倍になる）、首の傾きやねじれが見られる斜けい、膝の過伸展や足部変形などがあります。発生率は冬に多くまた男女比は1:5と女子に多く、そして第1子に多いのが特徴です。股関節は開排位（股関節を開いた状態）で最も安定します。これは大腿骨頭の球心性が得られるためです。よって開排位を妨げないことです。おしっこの仕方は、首が据わる前は股の間に手を入れて開排を促す、首が据わってからはお互い前向きとなって開排位となる抱っこをすることなどが大切です（おんぶばかりしないようにする）。また先股脱は出生児には脱臼の無い症例もずいぶんあるようです。おむつの当て方や抱っこの仕方一つで先股脱はかなりの確率で予防できるのです。まだ布おむつの頃、先股脱の発生率は2~3%でしたが最近では0.1~0.2%とかなり減少してきています。4カ月健診以前でも家庭でお母さんやお父さんの観察で早期発見が期待できます。早期発見で一番大切なのは何と言っても視診と触診です。特に左右差を見ることはとても大切です。例えばおむつ交換のときやお風呂に入るとき、抱きかかえるときなどは、どちらかの股関節の開きが悪くないかどうか、不機嫌な顔をしないかなどご両親が最初に気付かれるケースもとても多いと思われます。またあおむけで膝を立てて膝の高さを比較するなどとても有効です。それが早期発見、早期治療につながります。新生児期（生後4週まで）や乳児期（生後1年まで）では特にご両親のちょっとした観察がとても大切になってきます。少しでも異常を感じたらすぐに専門機関を受診し早期発見、早期治療に努めましょう。